

対象者の着目点を提示するICT教育支援が理学療法士の思考に与える影響

○吉田 龍洋¹⁾, 畠山 駿弥²⁾, 堀 寛史³⁾, 松下 光範⁴⁾

- 1) 岸和田徳洲会病院 リハビリテーション科
- 2) 兵庫県立尼崎総合医療センター リハビリテーション部
- 3) 甲南女子大学 看護リハビリテーション学部
- 4) 関西大学 総合情報学部

キーワード：臨床教育、ICT教育支援、理学療法プロセス

【はじめに、目的】

理学療法初学者は初期情報からあらゆる可能性について想起できてないことが課題とされている。現場では診断名から必要である情報収集や理学療法検査の実施ができず、結果の認識で齟齬が生じることで問題点の把握が適切にできないことを経験する。したがって、本研究では理学療法プロセスの序盤における教育支援に着目し、理学療法士の情報入力に応じて各情報や検査の優先度を提示するシステムを構築し、理学療法士の思考に与える影響を調査した。

【方法】

急性期病院に所属する1年目から5年目の理学療法士20名に対し、模擬症例(大腿骨頸部骨折術後症例)に対する統合と解釈の記述と模擬症例の問題点を箇条書きで抽出する課題を2回に分けて与えた。統合と解釈はデータを盲検化し、大学教員2名に既存のルーブリックに沿って15段階で採点を依頼した。1回目の統合と解釈の採点結果を元に被験者を上位から順にランダムに割り付け、同一課題をシステム使用下で行う10名と、システムを使用せずに同一課題を行う10名に群分けを行った。なお、1回目と2回目の模擬症例は大腿骨頸部骨折患者であるが、別の症例内容としている。問題点列挙に関してはICFに基づき、各項目に正答を設定し、正答に対する再現率と適合率の調和平均であるF値を求めた(以下：機能面F等)。以上の統合と解釈における採点とF値の2点に関して定量分析と定性分析を行った。定量分析は2回目課題のシステム使用群と非使用群における採点と問題点F値の差にMann-WhitneyのU検定を行い、効果量 r を算出した。定性分析は記述された文章の確認とシステム使用群にアンケートを行った。

【結果】

統合と解釈の採点はシステム使用群と非使用群において効果量は小さい結果となった($r=0.09$)。問題点F値は個人因子($r=0.45$)とICFの各要素全てを合わせた総合に関しては使用群と非使用群において中等度の効果量を認めた($r=0.52$)。しかし、理学療法士が主として扱う心身機能面の問題点F値の効果量は小さい結果となった($r=0.26$)。

【考察】

今回、模擬症例のBMIを着目点としてシステムが提示したことにより、個人因子に引張られる形で中等度の効果量を認めたと考えられる。統合と解釈においては効果量は小さかったが、採点下位3名においてはシステム非使用群と比較し、点数は上昇傾向であり、定性分析と合わせても一定程度の効果はあると考えられる。心身機能面に関しては、模擬症例が両側股関節伸展 5° であるにも関わらず、患側股関節伸展制限のみを列挙する被験者が多く、機能面F値に影響を与えたと考えられる。

【結論】

対象者の着目点を提示するICT教育支援は、見落としやすい項目の認識を高めることには有効であるが、心身機能面のF値と論理性の向上には課題が残る。

【倫理的配慮】 対象となる理学療法士に書面を用いて説明し、収集したデータの使用方法や発表に関して同意を得た。